

モノづくり革新の **ススメ** ⑤⑥

◆ 現場情報の自動収集に道具立てを ◆

一日の作業指示の出し方で、次のどちらの組織の管理レベルの改善がより進むだろうか？

- ・ A社—x 製品を○個
- ・ B社—x 製品を作業 手順 a⇒b⇒c⇒にて、1個5分サイクルで○個

B社の方式が正解との意見に異論はないだろう。正しい作業方法をしているか、進捗（しんちよく）ペースは妥当か、結果として生産性は妥当か—の良否のジャッジができ、処置や指導・改善ができるからである。

なすべき方向性は明快だ。そこで、A社方式からB社方式への指示管理に移行しようと、時刻に対するアウトプット数の予定と実績の把握を試みるものの、A社方式が染みついた中小モノづくり企業の職場では、容易には移行が進まない。気の進まない管理に対する「見られてたまるか攻防戦」の始まりだ。

一見、賛同が示され、良き兆しを期待するものの、「こまめな記録は面倒だ」とおおまかで不正確な記録、煩雑な記録データの入力・分析で、記録は再三山積み状態で放置される。その結果、正確性とタイムリー性を欠いたフィードバックとなり、やがて「ホラッ！役に立たないのに、こんな面倒くさいことはやってられません」との声に押されて、いつしか元の木阿弥状態に陥る。

そうならないようにする際に役立つのが、現場情報を自動収集・分析できる道具立てだ。キーワードは、「手間なく」、「一気に」、「正確に」、フィードバックだ。昨

早く正確にフィードバック



KWPコンサル
代表取締役

本多 貴治

今、中小でも十分手が届くレベルに環境が整ってきた。前述の例では、センサーで製品のアウトプットを感知し、予定線に実績を映し出せば、いとも簡単に実現ができる。すると不毛な消耗戦を経る間もなく、早くて正確なフィードバックを受け入れざるを得なくなり、前向きな思考と取り組みに集中する次なる段階へと移行させることができる。

上記ペース管理のほかにも、ひとやモノの動線、設備の稼働などにも、同様に活用できる場面が存在する。「見られてたまるか」の消耗戦を続けている中小モノづくり現場に、現場情報自動収集・分析ツールの活用を是非とも推進させたいものだ。

